報告１

アジアにおける学生服
日本・中国・シンガポールを中心に

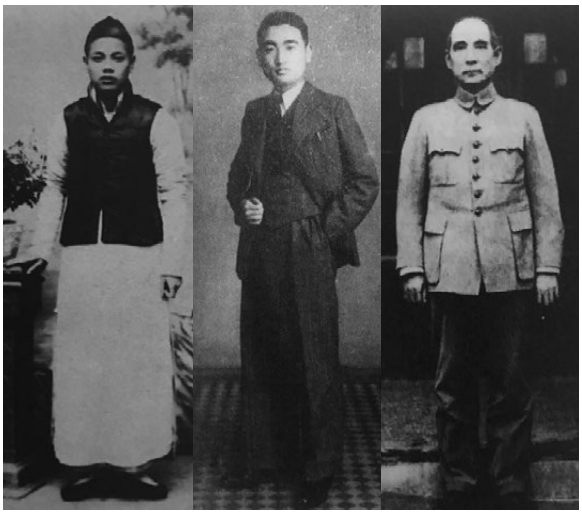
劉 玲芳　　大阪大学日本語日本文化教育センター 特任助教

研究の背景と目的

報告者は博士論文において、日本と中国双方の近代における服装の交流について研究しました。そのなかで「学生服」という男性の服装が一つのキーワードとして出てきて、これを通じて日中の男性の交流が盛んに行われていたことがわかりました。今回の報告では、その博士論文の一部から発展させた内容について紹介します。

まず、中国人男性の服装について簡単に説明します。中華民国時代の男性の主な服装が３種類あると、これまでの中国の服装史のなかでよく言われています。具体的に言えば、長袍馬褂というワンピースのようなものが中国人の伝統の服装で、もう一つが洋服、そして中山装という三つの服装が、中華民国時代の男性の服装だと服装史のなかでは言われてきました（資料１－１）。

一方、先行研究では、この三つの服装以外に「学生装」という言葉が出てきます。それについて紹介した資料もありましたが、その内容は簡略的かつ曖昧な記述ばかりでした。それらの記述の中に、「学生装は日本の服装の影響を受けて中国に伝わってきた服装だ」という説がありましたが、中国側の学生装と日本の学生服とが同じものだと証明する根拠はまったくありませんでした。さらに、学生服が中国に伝わってきた経緯についても、これまでの資料のなかでは不明でした。また、なぜ日本の学生服が中国本土に現れたのか、その理由について言及した先行研究もほぼ見当たりませんでした。



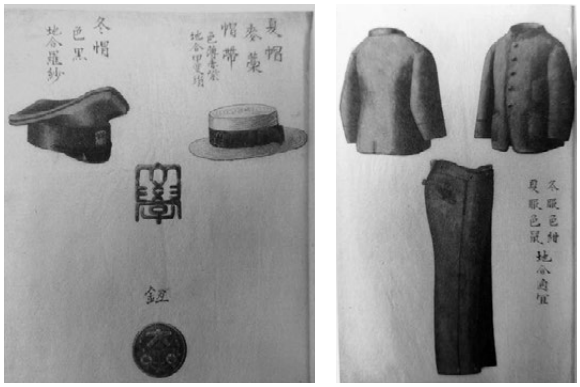
資料１－１　中華民国男性の三種の服装
――長袍馬褂〈左〉／洋服〈中央〉／中山装〈右〉
出典：中山装姿の孫文……袁仄・胡月（2010）『百年衣裳』三聯書店、115頁、長袍馬褂および洋服の男性……廖軍・許星（2009）『中国服飾百年』上海文化出版社、69、89頁

そのため、こうした疑問を解消するために調査を行い、「中国における学生服の誕生と変遷」という論文を2018年に発表しました。本日は、報告者自身のこれまでの研究内容を踏まえて、20世紀初頭において、アジア――主に日本、中国、シンガポール――のなかで学生服がどのように展開してきたのか、その展開のルートや実態を明らかにしたいと思います。

1. 学生服の由来

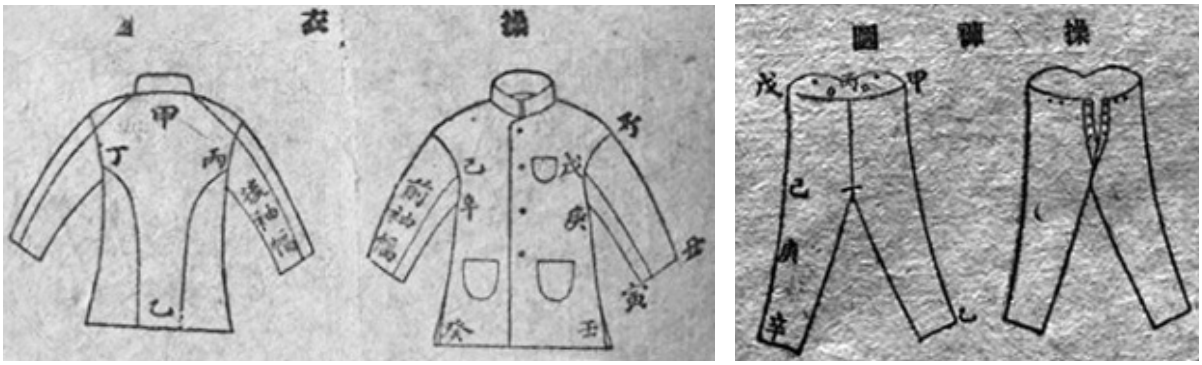
まずは日本の学生服の由来について簡単に紹介します。学生服は、周知のように、日本人男子学生が着用する制服です。1879年ごろに、男子学生の制服として採用し始めた学習院の学生服は、プロシアの軍服をもとに考案されたと言われています。それは詰襟、五つボタン、箱ポケット、雨蓋（フラップ）ポケットつきの上衣と長ズボンというスタイルでした。1886年には東京大学が、詰襟、金ボタンの制服と制帽を定めることによって、資料１－２に示したような形の学生服が日本全国に広まることになりました。

他に、日本の学生服は、学校によって学生服の形も色も若干違います。通常は、夏は白あるいは鼠色、冬は紺色もしくは黒色を学生に着用させることが多かったです（資料１－３）。このような学生服に関する色の文化は中国やシンガポールに影響を与えていくことは後の話になります。



資料１－２　東京大学の制服
出典：難波知子（2016）『近代日本学校制服図録』創元社、19-20頁

資料１－３　旧制中学校の学生の制服姿（３月頃）
出典：難波知子（2016）『近代日本学校制服図録』創元社、46頁



資料１－４　中国の操衣『第三十六編 衣服』（1919）
出典：『日用百科全書』商務印書館、11-12頁

2. 中国における「学生服」

前述したように、一般的に、中華民国時代の男性の服装には、長袍馬褂、洋服、中山装の三種類があると言われています。ところが、それ以外に、日本の「学生服」に似ているような言葉、つまり「学生装」が出現した経緯があります。20世紀初頭の中国には、当時の新聞記事や文学作品に「学生装」というキーワードがしばしば見られます。ところが、中国の「学生装」と日本の「学生服」とがまったく同じものなのかについては、研究を始めた当初は報告者はたいへん疑問に思っていました。そこで「学生装」と「学生服」とが同じものであるかどうかを検証するために、さまざまな資料を集めて調べました。

たとえば、張競生という北京大学の教員で、当時「性科学の博士」として話題になった人物が書いた『美的人生観』[1]という本の「学生装」についての文章の訳をご覧ください。「学生装の別称は、操衣服、つまり操衣のことである。『軍人装』とも呼ばれているものである。具体的には、詰襟の上着にズボンと合わせて着たり、寒くなったときに、上着を羽織って着たりするもののようである」という一文が見られます。簡単にまとめますと、「学生装」には二つの意味があります。一つは、体操するときの体操着、つまり「操衣服」のことです。もう一つは、「軍人装」とも呼ばれているものなので、軍服のような要素が含まれていることを示していると考えられます。

もう一つの例は、中国の有名な作家である魯迅が1932年に書いた、『世界日報』の教育コラムに掲載されているエッセイです[2]。「学生装」に関する一文を見てみますと、「操衣は学生たちが体操をするときに着る服装である。しかし、学生たちはうやむやのうちに体操の練習をしなくなり、軍服姿の写真だけが残っている」と記されています。ここでの軍服姿というのは体操着姿のことです。

そこで、操衣がどういう形なのか、実際に調べてみました。1919年ごろに出版された『日用百科全書』シリーズの「第三十六編　衣服」の中に、中国の操衣、いわゆる体操着の作り方の図版が載っています（資料１－４）。

1）張競生『美的人生観』（1925）。
2）魯迅「今春的両種感想」『世界日報』（1932年11月30日付）。

資料１－５　普通体操の書物に関する翻訳

出版年	タイトル	訳者（出版社）	底本
1900初版	『日本普通体操学』 （1903年1月初版、8月再版、1906年3月三版、4月四版）	王肇鋐 （六芸書局）	『普通体操法』坪井玄道、田中盛業 編（大日本図書、1898）
1903	『蒙学体操教科書』 （最初の正式の小学校体育教科書）	丁錦 （上海文明書局）	『小学普通体操法』（坪井玄道、田中盛業編、1884） 凡例による『新撰體操書』ジョールジ・エ・リーランド 編［他］（体操伝習所、1882）、『新制体操法』（体操伝習所、1882）
1903	『高等小学遊戯法教科書』	董瑞椿、徐勤業 （上海文明書局）	『新案遊戯法』山本武 編（松村九兵衛出版、1897）
1903	『普通体操法』 （学部認定　中学校教科書）	作新社	『新撰體操書』ジョールジ・エ・リーランド 編［他］（体操伝習所、1882）、『新制体操法』（体操伝習所、1882）
1906	『新撰小学体操法』 （学部認定　小学校教科書）、1907年再版	李春醲 （上海昌明公司）	『新撰小学校体操法』 川瀬元九郎、手島儀太郎 編（大日本図書、1904）
1907	『新撰高等学校体操教科書』	金匱、蔡雲編訳 （上海文明書局）	『新撰小学校体操法』 「第三篇　高等小学校教程」川瀬元九郎、手島儀太郎　編（大日本図書、1904）

大まかに見ると、中国の操衣は明らかにスーツや背広などの洋服ではないことがわかります。日本の学生服とまったく同じものだとは言えませんが、だいたいの形が日本の学生服と似ていると思います。それに、操衣の襟の部分は日本の学生服と同じような詰襟です。ただ、ボタンが学生服の五つボタンより一つ少ないことが図でわかります。

さらには、中国の「学生装」と日本の「学生服」とがどのような関係なのかについて論じた直接の資料を見つけました。それは1932年の『申報』に掲載された記事です[3]。記事の内容は下記のようになります。「学生装は軍服から変わってきたものである。日本の明治維新後、日本人は軍服を着慣れ、和服より便利だと意識した。そこで、退役してからも他の生地を使用して、軍服を模した服を着ていた。経済的な理由で、多くの学生は、退役軍人が着用する服を着るようになった」。一見すると、「学生装」という衣服の由来について紹介しているが、中国のことを言っているのか、それとも日本のことを言っているのかはかわかりづらいかもしれません。ところが、文脈から分かるように、当時の中国人が使用していた「学生装」という言葉と「学生服」は同じものであり、本来は日本人の衣服を指していたことがわかります。要するに、中国の「学生装」は日本の「学生服」と同じように思われたので、ここでは「学生服」という言葉を使わずに、「学生装」をそのまま使っていることがわかります。

ここまで紹介してきたいくつかの文学作品や新聞記事の内容をまとめると、中国側で20世紀初頭に使われている「学生装」という言葉は、日本側の「学生服」とほぼ同じだと考えられます。その特徴としては、一つは操衣、つまり体操するときに着る体操着であったということ、もう一つは軍服の要素があるということです。

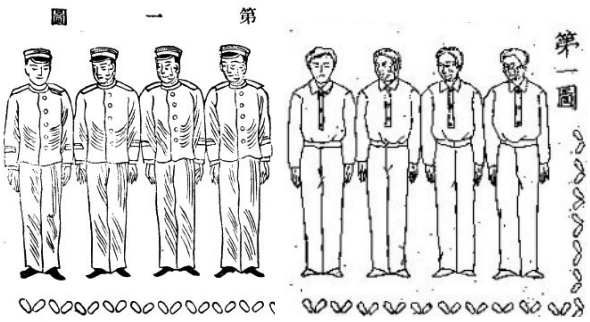
３.「学生服」伝来の経緯

この二つの特徴がわかったうえで、学生服がいったいどのように日本から中国に伝わってきたのかについて見ます。先ほど述べたように、中国の学生服の二つの特徴には、体操するときに着る服装、つまり「操衣」というキーワードが出てきました。そこで、体操と中国の学生装と何らかの関わりがあるのではないかと考えて、調べてみました。

日清戦争後、日本に負けた中国は大量の留学生を日本に派遣したり、日本からたくさんの教員を招聘したりして、日本の近代教育制度を学ぼうとしました。そのような風潮のなかで体操が、近代教育の一つの重要な科目として中国で導入されていきます。一つ注目すべき現象として、当時は、多くの日本の体操関係の書籍が中国で翻訳されていました。中国の研究者の研究結果によると、1890年から1910年の間に、中国で出版された体操関係の教科書（外国語翻訳書や中国人編著の両方を含む）は88冊ありました。そのうち日本語の本がそのまま翻訳されたものと、日本の影響を受けて編纂されたものをまとめると合計40冊があり、半分ぐらいになります。

40冊の翻訳書には、実際にどのようなものがあったのかを具体的に調べて、報告者は資料１－５のよう

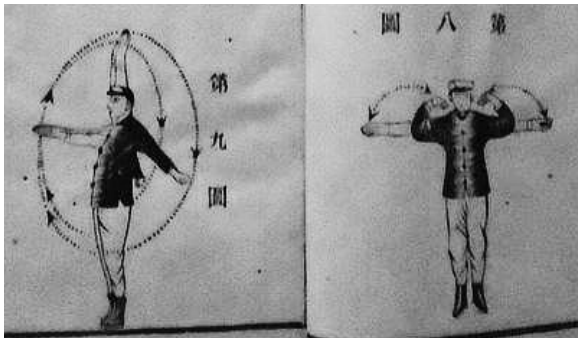
3）程鵬「答改良社会討論会」『申報』（1932年8月１日付）第19頁。



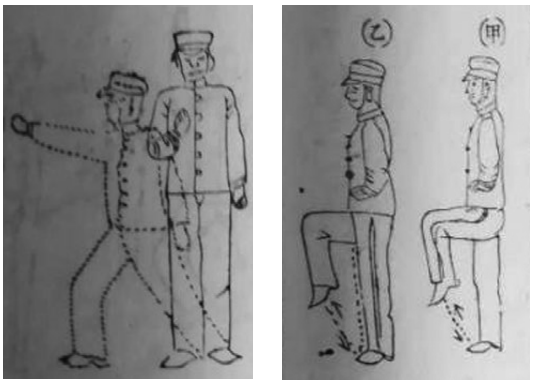
『蒙学体操教科書』
（中国の翻訳本、1903）

『小学普通体操法』（上巻）
（日本の原本、1884）

資料１－６　事例１ 普通体操教科書に登場した軍服

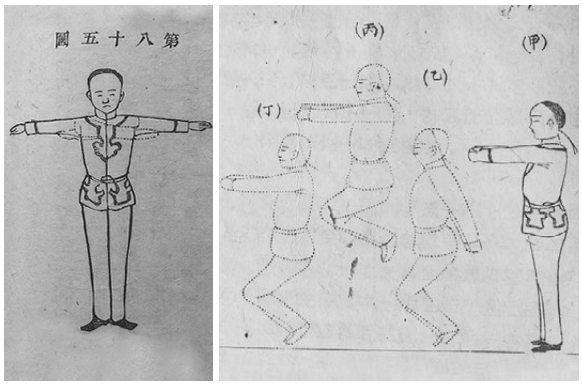


資料１－７　事例２『日本初等小学体操教科書』（1906）
鄭憲成（孫文が創設した東京青山革命軍事学校にて留学）、新民書局、
1904年初版、1906年再版



第４技　　第２教　第１技

資料１－８　事例３
陳永栄『漢訳日本改正普通体操教科書』



第85図　　第83図

資料１－９　学部編『初等小学体操教授書』（1907）
唯一公式の体操教科書

なリストを作りました。このなかでもっとも重要なのは、1903年の『蒙学体操教科書』です。こちらは丁錦という中国人が翻訳したものですが、この本の底本は、日本近代の最初の体育教員と言われる坪井玄道が編纂した『小学普通体操法』です。この『蒙学体操教科書』は、中国で最初の正式な小学校体育教科書として位置付けられています。1903年から1906年までの間に多くの学校で使われ、９回ほど再版されています。その他に、日本の体操教科書を底本とした重要な中国の体操本には、1903年に出版された、学部認定の中学校教科書である『普通体操法』とか、1906年に出版された『新撰小学体操法』などもあります。

『蒙学体操教科書』は、中国で最初に出た体操に関する書物ではないですが、影響力はもっとも大きかったものです。この『蒙学体操教科書』と、底本である日本語の『普通体操法』とを比較してみると、文字の内容はほぼ同じで、そのまま中国語に翻訳してあります。興味深い点として、日本の底本ではシャツにズボンという図だったものが、中国の翻訳書になると軍服のような服装の図になっていて、これは翻訳者の丁錦あるいは出版社が意図的に変えたものだということがわかりました（資料１－６）。

それ以外に、1904年に出版された『日本初等小学体操教科書』の図にも、軍服に近いような特徴が見られます（資料１－７）。『漢訳日本改正普通体操教科書』（資料１－８）も同様です。中国の伝統的な服装でもなく、洋服でもなく、軍服に近く、学生服に近い服装が見られます。ここまで見てきた事例は、いずれも中国の民間人や民間組織が編纂あるいは翻訳した本の中の図です。

しかし、清朝の政府として、文部科学省のようなトップの教育組織が編纂した体操教科書の中では、図版の中のキャラクターは、学生服のようなものではなくて、中国の伝統的な民族式の服装を身に纏っていることがわかります。しかも、彼らの髪型も弁髪です（資料１－９）。

さて、実際に、清朝末期の中国人が、どのような学生服を着ていたのかを写真で見ます。資料１－10に示したのは、西安の新型小学校の生徒の体操の様子です。ここでの服装は学生服のような形で、帽子もかぶっています。ただ、中国の伝統的な靴を履いています。子どもたちには、まだ弁髪が見られます。資料

資料１－１０　清朝末期、西安の新式小学校の生徒、体操中の様子
復刻版、個人蔵

資料１－１１　１９０４年頃の武安県高等小学校（現・河北省）の記念写真
中国国家博物館蔵

１−11の1904年ごろの現在の河北省にある小学校の記念写真も、先ほどの体操教科書にかなり近い学生服を着ています。一番前の一列に座っている人たちは、地方の官僚や学校の教育関係者ですが、この人たちが着ているのは清朝の伝統的な服装です。他に、1907年頃、現在の天津の高等小学校の教員と学生たちの記念写真を見ても、だいたい同じです。学生たちは学生服を着ており、制帽もかぶっています。教員や他の学校関係者はみな伝統服です。

資料１−12の現在の河北省にある高等小学校の集合写真を見ると、これまで見てきた写真と、学生たちの服装はだいたい同じですが、若干違いがあります。中国の伝統的な紐ボタン式の服装と、通常のボタン式の両方が見られます。しかも、資料１−12の中の学生たちは前述した軍帽風の帽子ではなく、中国の伝統的な帽子をかぶっていることが見てとれます。そこで、中国に現れた学生服は学校や地域によって異なり、さまざまなスタイルやコーディネートが存在していたことがわかります。

ここまで資料を見てくると、近代日本の学制を模倣していた中国では、学生服を導入するきっかけは体操と体操着の導入だったことがわかります。つまり、清朝末期の新しい小学校の体操着として着られていたものが学生服の原型だといえます。一方で、伝統式の書院のような学校であれば、長袍馬褂のような伝統服が主流でした。

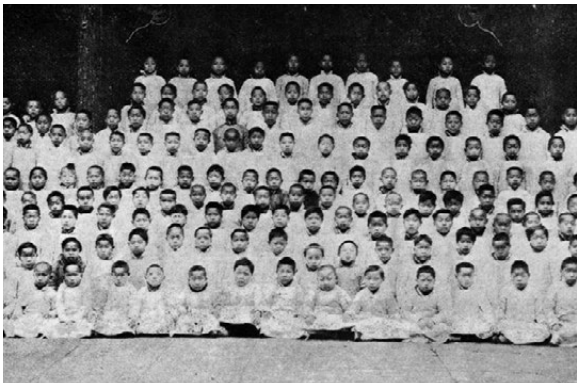
４．体操着から学校制服へ

次に、体操着からどうやって学生服になっていったのか、その変遷の過程を見ます。じつは1905年の『申報』には、有力な教育関係者が学生の服制について、清政府に提案した記事が掲載されています。そのなかでは、「軍事（武）を学ぶ学生は常に操衣を着ることができ、文を学ぶ学生は体育をするときのみ操衣の着用が許される。それ以外の時間は、儀式を行うときは必ず、軍事（武）を学ぶ学生も文を学ぶ学生も、全員が長袍馬褂を着用することが必須である」と主張されています。

資料１－１２　清末、粛寧県（現・河北省）高等小学堂官師学生集合写真
復刻版、個人蔵

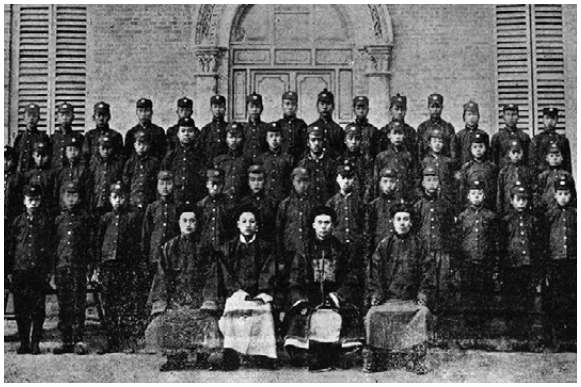
なぜこのような記事が書かれたのかと言いますと、軍事（武）あるいは文を問わず、当時の新型の学校では、たくさんの学生たちは操衣を愛用していたからです。しかし、大量の学生たちが操衣を着てみたいと考える現象が起こってきて、清朝の服制の基盤が動揺する恐れが生じたのだと考えられます。当時、学生はまだ特殊なグループとしては見られておらず、特定の軍事関係の学生や、特定の運動時間以外には、一般の学生の服装は他の中国人の服装とほとんど変わりがなく、みんな長袍馬褂でした。

たとえば民国の初期には、資料１−13の写真のように、学生たちは白の長袍を着ています。ワンピースのような１枚の服です。ところが新型学校になると、



資料１－１３　慈渓城立中城初高小学（民国初期）
復刻版、個人蔵

資料１－１４　1906年頃益聞社高等小学校（現・福建省）の記念写真
ハーバード大学図書館蔵



資料１－１５　清末、隆平県（現・河北省）高等小学堂
復刻版、個人蔵

資料１－１６　「学校制服規程」（1912年９月９日）

第一条　男女学生制服

甲　男女学生**制服形式**與通用之**操服**同

乙　寒季制服用黒色或藍色

丙　暑季制服用白色或灰色
前両項制服一校中不得用両色

丁　制帽形式與通用之**操帽**同　寒季用黒色暑季頂加白套或
用本國自製草帽　靴鞋亦用本國製造品
前項制帽　靴鞋一校中不得用両色

戊　各学校得特製帽章頒給学生綴於帽前以為徽識

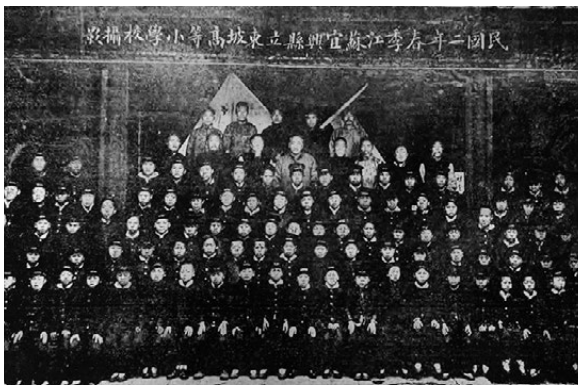
己　大学学生制帽得由各大学特定形式但須呈報教育総長

出典：『大公報』第3628号、第19頁

資料１−14は福建省にある小学校の写真ですが、学生たちは全員学生服のような服を着ていて、大人の教員たちは伝統服の長袍馬褂を着ています。学校によって違うのですが、学生たちの服がばらばらの場合もあれば、学生が全員同じ制服を着る場合もありました（資料１−15）。

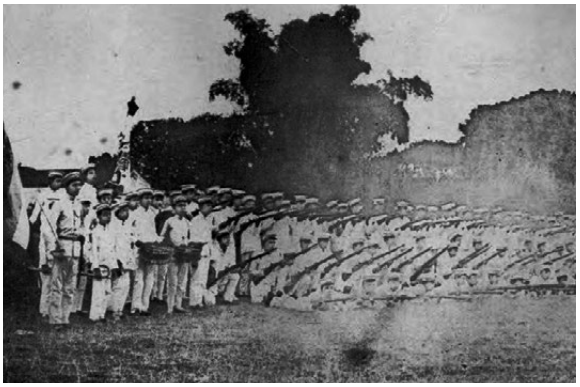
ここまで見てきたのは清朝末期のころの新型学校の状況で、記念写真では全員が学生服を着ていましたが、そのときはまだ学校の制服として認められていませんでした。学生服が実際に新型学校で制服として認められたのは、中華民国以降のことです。1911年に辛亥革命が起こって清朝が倒れて、新たに中華民国が成立しました。中華民国政府は全国民向けに新しい服制を発布して、そのなかに学生向けの制服の規定もありました。具体的な内容は、1912年9月9日付の『大公報』に掲載された『学校制服規程』に見られます。ただし、いまのところ小学校の服装規定はまだ見つかっておらず、高等小学校以上の学生の服装規定を資料１−16として載せておきます。

具体的に見ますと、男性も女性も、制服の形は、それまで一般的に使われている操衣、体操着と同じです。冬は黒あるいは紺色、夏は白あるいは灰色という色の規定も細かく決められました。色に関するルールという点から、中国の学生服は日本の学生服とほぼ一致していることが分かります。

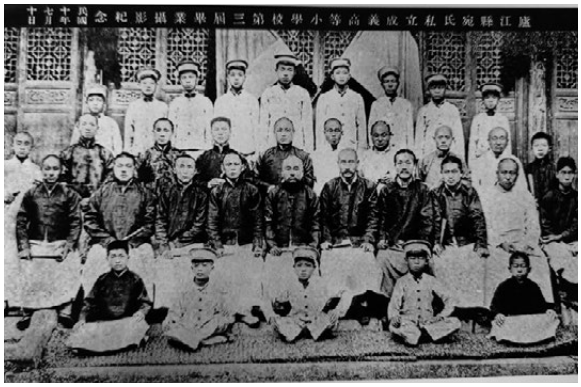


資料１－１７　1913（民国２）年春季
江蘇宜興県立東坡高等小学校（現・江蘇省）
復刻版、個人蔵

実際に中華民国時代の学生服に、どのようなかたちがあったのかを見ます。たとえば1913年春に撮影された、現在の江蘇省にある小学校の集合写真があります（資料１−17）。それを見ると、学生全員が同じようなかたちの学生服を着ています。学生服の色は

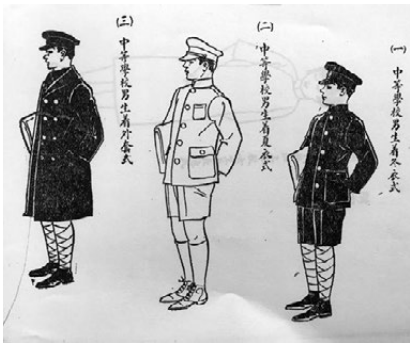


資料1－18　潮州普寧黄都高等小学校野外演習
密集射撃撮影1915(民国4)年9月(現・広東省)
復刻版、個人蔵

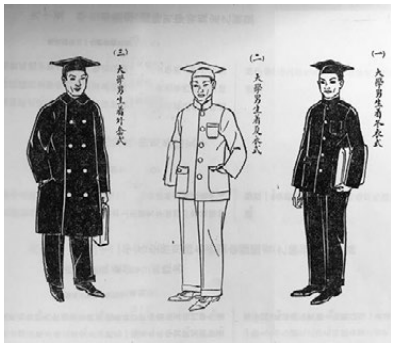


資料1－19　1921(民国10)年7月
廬江県宛氏私立成義高等小学校(現・安徽省)
復刻版、個人蔵

小学校男子学生の制服



中等学校男子学生の制服



大学男子学生の制服

資料1－20　『学生制服規程』(1929年4月20日、中華民国教育部発布)
出典：中華民國教育部參事處(1936)『教育法令彙編』(第1輯)商務印書館、94-95頁

恐らく黒でしょう。

現在の広東省で1915年9月に撮影された、郊外で小学生の兵式体操の訓練をしている写真(資料1－18)を見ると、全員が白の学生服を着ています。また、1920年の春に、福建省の小学校で撮影された写真を見ると、この学校の場合は他の学校と違って、後ろの一列の学生たちは白の学生服で、前の学生たちはほぼ黒の学生服です。つまり、同じ学校の中で、白と黒の学生服を同時に着用している事例があったわけです。そして、1921年7月に撮影された安徽省にある学校の写真(資料1－19)を見ると、学生服姿と伝統服姿の学生の写真が同じ学校の中でも見られました。要するに、学生服と伝統服の両方が同時に同じ学校の中で存在していたことがわかりました。

ようやく、学生服が正式な制服として認められる日がやってきました。1929年4月20日に、小学校、中学校、大学まで、学生の制服に関する規定が正式に発表されました。そのなかに資料1－20に示した図も載せられていて、どんな服装なのかがよくわかります。ズボンと襟の部分が変わって、たとえば小学校は、左の図のとおり、長ズボンではなく半ズボンです。しかも夏用の学生服の襟は、詰め襟ではありません。中等学校の図は、ズボンが変わって半ズボンです。大学生の場合は日本の学生服とほぼ同じかたちで、長ズボンで詰め襟です。ボタンも五つあります。

中国本土での変遷過程を見てきて、どういうことがわかるかと言いますと、体操の導入にともなって、中国本土では、学生服を体操着として、清朝末期の新型学校に導入したということです。ただ、清末頃の学生服はあくまでも体操をするときの服装で、学生の制服ではありませんでした。正式に学生の制服として認められたのは、じつは中華民国以降のことになります。

5.シンガポールにおける学生服の実態

最後に、シンガポールにおいて学生服がどのように導入されて、どのように学生に着用されていったのかを見ていきたいと思います。

まず簡単にシンガポールの華僑についてお話しします。15世紀以来、たくさんの中国人がシンガポールに移民をし始めました。とくにアヘン戦争後の50

資料１－21　端蒙学校の校史　〈資料に基づき筆者作成〉

年代	教員数	学生数	学生種類
1906(清光緒32年)	2	60	全員初級
1907(清光緒33年)	6	146	うち高級予備生36名
1910(宣統2年)	7	152	うち高等生21名
1912(民国元年)	不明	185	うち高等生20名
1914(民国3年)	不明	190	うち高等生26名
1916(民国5年)	不明	265	うち高等生21名
1919(民国8年)	10	276	
1920(民国9年)	11	328	
1922(民国11年)	12	385	
1924(民国13年)	14	477	
1925(民国14年)	14	498	
1928(民国17年)	26	600人以上	

参考資料：『端蒙学二十五周年記念刊』(1931年)、1-6頁

年から60年の間、シンガポールに移民した中国人は数十万にのぼります。当時は、現代のような学校ではなく、書院、塾のような伝統の教育システムがあって、中国本土と同じように四書五経を中心に教えていました。

1905年に、中国本土では清政府が科挙制度を廃止しました。つまり伝統的な書院で四書五経を学んで科挙試験に通って出世することはもうできなくなります。そこで、伝統的な教育システムの変更にともなって、シンガポールにおいても変化が起きました。

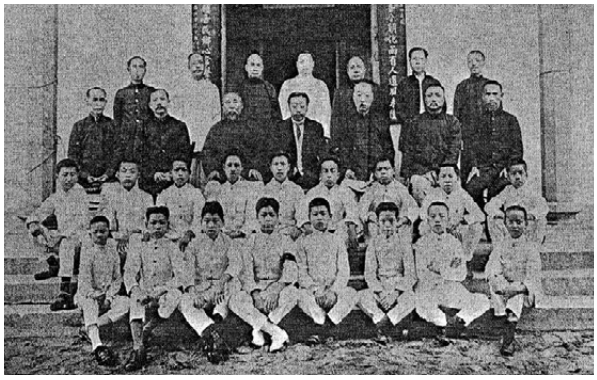
一つの事例として、1906年に創立された端蒙学校を取り上げます。これは広東省の潮州人たちによってつくられた学校です。創設のきっかけは、中国の清朝で軍政と民政の両方を統括する官僚が派遣した劉徴君から「中国本土のように新しい小学校を作りましょう」という提案があったので、創設者たちと協議して端蒙学校が作られたと言われています。当初は教員わずか２名で、初等（尋常）小学校の学生は60名しかいませんでした。

端蒙学校の歴史を簡単に振り返ります（資料１－21）。1906年に学校が設立されて、徐々に大きくなっていきますが、1928年ごろまでには600人以上の規模になりました。この学校の記念誌には、毎年の学校の卒業生の記念写真がたくさん載せられています。１回目の卒業生の写真（資料１－22）を見ますと、1911年12月に高等小学校の卒業生が８名いて、尋常小学校の卒業生が18名いました。この集合写真は、卒業生だけではなく、学生全員の記念写真です。見てみますと、学生全員が同じ学生服を着ていることがわかります。後ろには清国を象徴する龍の旗も見られます。真ん中の後ろの部分を見てみますと、大人たち、学校の教員やシンガポール現地の官僚たちは、清朝の伝統服の漢服を着ています。清朝の官僚の身分を示す帽子もかぶっています。

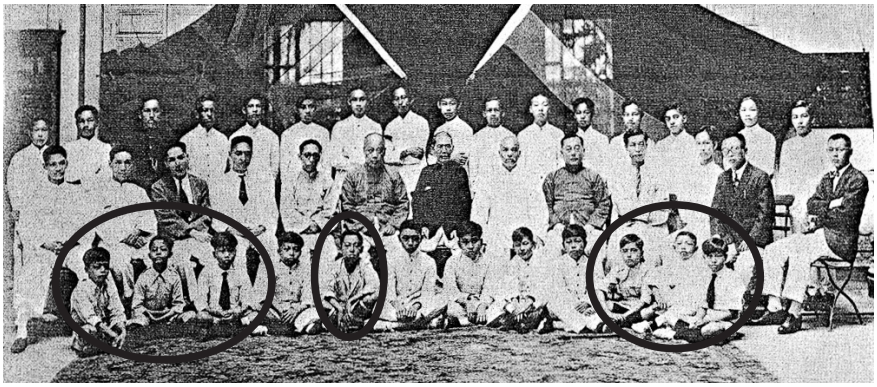
端蒙学校の卒業生の写真や、学生の記念写真を集めてきて調べたところ、４回目の卒業生のときもそうですが、学生さんは白の学生服を着ています（資料１－23）。1917年もほぼ同じです。学校の教育関係者たちも伝統服か洋服を着ますが、ときには教員も学生服を着る場合があります。その点についてはまだ調べていないので何も言えませんが、学生たちはだいたい白の学生服を着ています。６回目の卒業生もそうです。

1925年になると、学生服を着る学生がもちろん主

資料１－22　端蒙学校初高等学生卒業写真（第１回）1911年12月
出典：『新嘉坡端蒙学校三十周年記念刊』1936年、口絵写真



資料１－23　端蒙学校初高等学生卒業写真（第４回）
1915年12月高等・６名、初等・17名



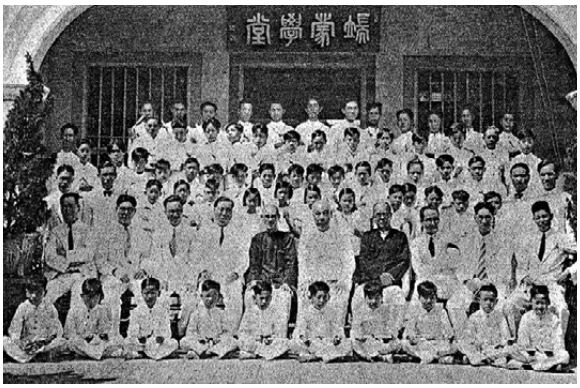
資料１－24　端蒙学校初高等学生卒業写真
1925年初等（第13、14回）、高等（第12回）

資料１－25　学生服に関する規定

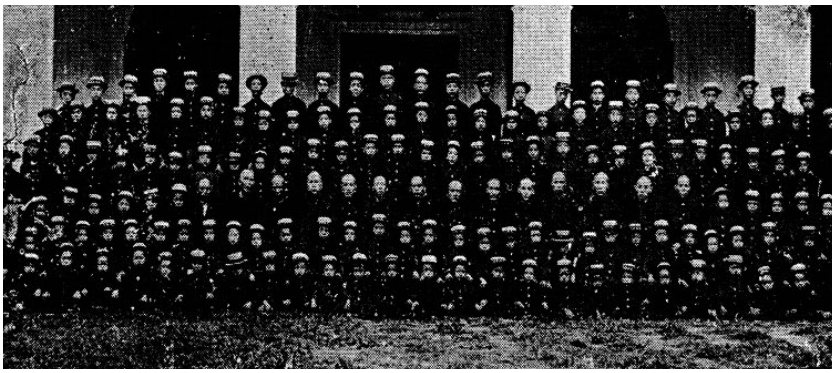
1933（中華民国22）年３月

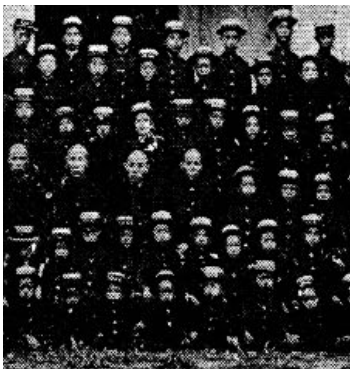
規定学生制服及徽章。
男生一律改装**企領白色学生装**、
女生一律穿白衫黒裙、
布料以採用国貨為原則
徽章図案、特請本坡美術家張汝器先生絵就、
即定製採用。

出典：李谷僧、林国璋編『新嘉坡端蒙学校三十周年記念刊』1936年、31頁



資料１－26　端蒙学校初高等学生卒業写真　1935年
高等（第29回）・16名



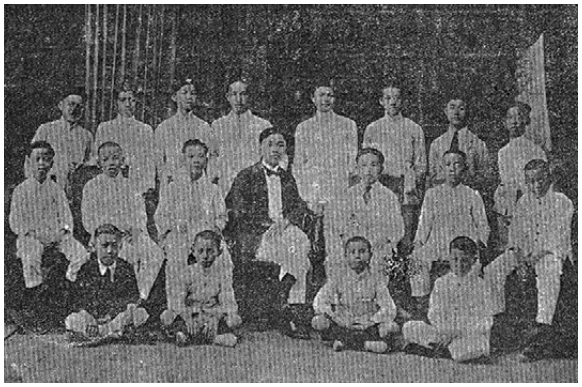


資料１－27　道南学堂（1907年頃創立）〈左は部分拡大〉
出典：『新嘉坡道南学校一覧』（1932）、口絵写真

流ですが、洋服姿の学生も見られるようになりました。たとえば1925年の写真（資料１－24）では、一番前の一列に座っている学生たちのうち、７人ぐらいは洋服を着ています。ネクタイを着けている学生も見られます。さらに1932年の写真では、前の学生も後ろの学生も全員洋服です。

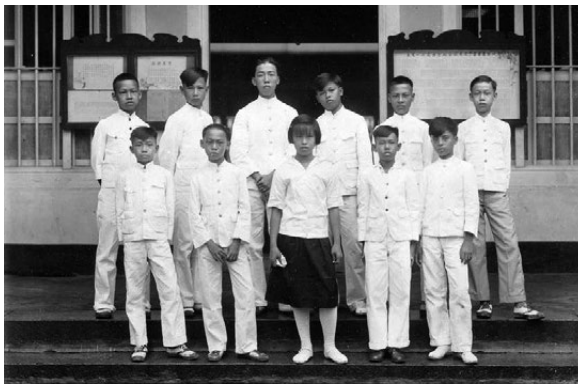
学生服以外に、徐々に洋服化していく学生も多くなってきたので、端蒙学校は1933年の３月に、学生服に関する規定（資料１－25）を発布しました。そのなかで、「男性は必ず詰襟の白の学生服を着ないといけない」という規定を決めました。それ以降は、全員洋服から白の学生服に戻りました。1935年の写真（資料１－26）では全員が白の学生服です。1936年も全員が白の学生服です。

端蒙学校は一例ですが、シンガポールにおいて他の華僑が設立した学校がどうだったのかを見ると、端蒙学校とほぼ同じころ、1907年に創立された道南学堂では、全員黒の学生服を着ています（資料１－27）。部分拡大して見ますと、帽子もかぶって、学生服を着ています。道南学堂の場合は、1925年ごろの卒業生の写真（資料１－28）では、洋服を着ている学生も見られますが、だいたいの学生は学生服を着て

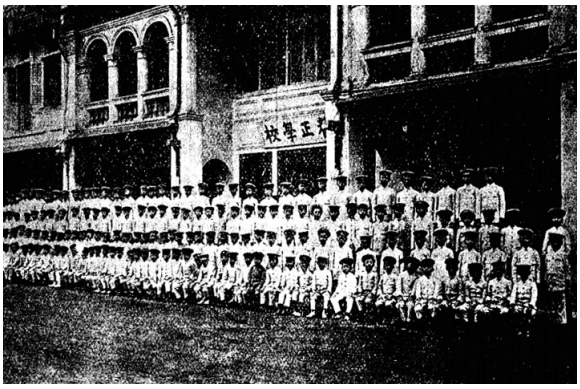


資料１－28　学生・教員卒業記念写真（道南学堂）
出典：『道南学校卒業記念冊』（1925）、挿絵、51頁

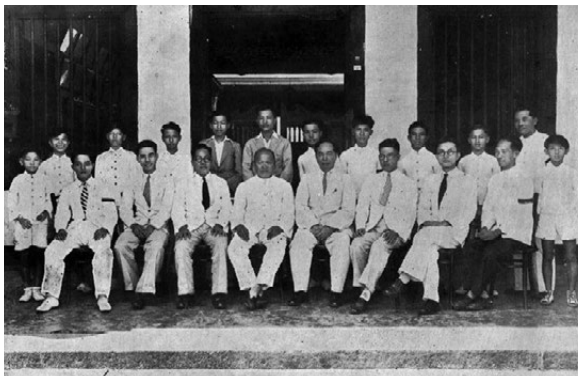
資料１－29　道南学堂の教室の様子
出典：『新嘉坡道南学校一覧』（1932）、挿絵写真



資料１－30　道南学堂（1931年）
出典：National Museum of Singapore



資料１－31　養正学校（1905創立）
1914（民国３）年　学生記念写真
出典：『新加坡养正学校概况』（1933年）



資料１－32　啓発学校（1906創立）
出典：『新嘉坡啓発学校半年刊』第二号（1932）、口絵写真

います。教室内の様子がわかる写真（資料１－29）もありますが、洋服ではなく、学生服のような服装を着ています。資料１－30は1931年の道南学堂の卒業生の写真です。同じ学校の中で若干かたちが違いますが、男性たちは白の学生服を着ています。

他に、1905年に創立された養正学校では、白の学生服を着て、帽子をかぶっています（資料１－31）。1932年の啓発学校の卒業写真（資料１－32）を見ると、ばらばらですが、洋服の人と学生服の学生さんがまだ見られます。

６．おわりに

日本の学生服がどのようにアジアで展開してきたのかをまとめます。まずは体操の導入にともなって、清末の新型学校の体操着として導入されました。そして、中華民国の時代になると、体操着は学校の制服として正式に決められました。一方、中国本土だけではなく、華僑が集まる華僑社会において、今回はシンガポールだけを事例としましたが、そちらにも影響を与えて、学校の制服になったことがわかりました。もちろん中華民国時代の学生の制服も、同時にシンガポールに次々と影響を与えたことがわかります。

もう一つ重要なのは、実際の写真を見ると、中国本土やシンガポールの学生服は、基本的に日本の学生服の形や色にしたがって発展してきましたが、日本の学生服とまったく同じものとは言えないことです。さらには、学校や地域によって若干の違いが見られました。細かいところに、たとえば、ボタンの種類や襟の部分、帽子の形や靴など、さまざまな違いがあります。まだ研究途中ですが、今回のご報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。

■質疑応答

後藤絵美（司会）　議論に先立つ事実確認などございましたら、この段階で出していただければと思います。

フロアから　基本的なことで教えていただきたいのですが、「学生服は軍服から変わってきたものである」という資料の原文に「日本維新徴兵後」とあります。これが、日本で徴兵が始まったことと軍服としての学生服というものが生まれたこととが関わっているように読めたので、清朝や中華民国において徴兵がどのような感じだったのかという関連が気になりました。まず事実確認として、「徴兵」について訳すときには入れたほうがいいのではないかということをお聞きしたいと思います。

劉玲芳　本来の歴史がこの資料に書かれていることとまったく同じかどうかについては、まだ私の中でもはっきりわかりません。ただし、日本の学生服の歴史としてこういう由来があって、こう発展してきたという説は、おそらく違うと思います。ここで中国人が言っている「学生装」というのは、おそらく当時の人が理解している学生服の歴史で、実際の日本側の歴史とはずれているかもしれません。日本の維新後に徴兵によって日本人が学生服を着るようになったというのは、おそらく違うと思います。この記事を書いている人が、当時の人として理解している学生服の歴史はどうだったのかということなので、事実というわけではありません。ここでこの記事を引用している目的は、文脈から分かるように、当時の中国人が使用していた「学生装」という言葉と「学生服」は実は同じものであることを強調したいからです。

杉本星子　いまのお話の背景をうかがいたいのですが、儀礼のときには、清朝の時代のいわゆる正装をするようにということがありますね。新しい近代的な学校制度が入ったあとに、体操服については日本のものを採用するわけですが、そのほかに儀礼や入学式などで着るような、制服的な中国の服があったのかというのが一つです。

もう一つ、シンガポールの場合はイギリスの学校制度を取り入れていると思います。そうするとミッション系なので、いわゆるシャツにネクタイという服装――イギリスなどはそうだと思いますが、シンガポールのミッション系の学校もそういう制服だったのか、この２点を背景として教えてください。

劉　まずは中国側の入学のときの制服ですか。

杉本　体操服はともかくとして、それ以外のところでも、学校制度を取り入れたときに、中国服の制服的なものを定めたのか、定めていなかったのか。

劉　これまでの資料によると、学校に行くときの学生の服装と日常の服とは、大きく変わることはあまりないと思います。むしろ、日常の服を着て学校に通うのは普通のことです。もちろん家庭や身分によって違いはあって、すごくいい服装と、普通の服装とがありますが、学生が着る決まった服装は、おそらくこの学生装以前にはなかったと思います。

杉本　学校制度と制服というのは、みんなで同じものを着ると身分や貧困が見えなくなるからということでわざわざ定めるわけですが、中国の場合、清朝の時代には、そういうかたちは決めていなかったということですか。

劉　そうですね。たとえば女性の場合も、いくつか写真がありますが、だいたいみんなばらばらです。好きな服装で学校に行きます。また、中国の場合よくあるのは、中流以上の家庭では教員を招聘して家に住んでもらって家族の全員に教えるかたちなので、服装にはそんなにこだわりがなかったと思います。

杉本　日本も着物はみんな好きなものを着ていましたね。もう一つ、シンガポールはイギリス領だったからミッションスクールの教育制度が入っていると思います。そこには制服があったのでしょうか。

劉　シンガポールの教育史についていろいろ調べてみましたが、シンガポールにおいては、民族によって、集団やグループによって作られた学校は違います。たとえば、華僑のなかでも福建省の集団と潮州人の集団はそれぞれの子供のための学校を作っています。先ほど報告のなかで取り上げたシンガポールの学校は、だいたいルーツが違います。ただ、学校の方針や制度を決める際に、ほんとんどの学校は、当時の中国本土、つまり清朝の方針、後に民国時代の教育学部の学制にしたがっていろいろ決めたのだと思います。

当時ミッションスクールの影響を受けていたのかどうかについてはまだ調べていませんが、1910年から1920年のころの写真を通して見ると、そんなに影響は強くなかったと思います。

森理恵　辛亥革命の後に、1912年に『学校制服規定』として定められたということで、「男女学生制服……」となっていますが、女子はどんな服を着ていたのかうかがいたいと思います。シンガポールだと、道南学堂の写真を見ると１人だけ女子が写っていて、

白いブラウスに黒いスカートですね。シンガポールの場合はわかりましたが、1912年時点での「男女学生制服」といったときの女子はどんな制服だったのか、もしわかれば教えていただきたいと思います。

劉　1910年代以降、民国時代の女子学生の服装は、男性より少し複雑です。民国時代の服装を話す前に、前の清国の服装の状況を紹介しておきます。大雑把にいうと、一般的に、中国人男性は資料1－1の写真のように、普段着として長袍馬褂、伝統服を着用しています。つまり、支配側の満民族の男性も漢民族の男性も同じです。ただし、女性の場合は違います。満族の女性の場合は、男性とほぼ同じようなワンピースのかたちの服装、つまり旗袍（現在で言うチャイナドレスの前身）を着用しています。それに対して、漢民族の女性はツーピースを着ています。これは明代（清以前の時代）の漢民族の服装をそのまま保っているスタイルで、上衣下裳と言います。実は、民国時代の女学生の新しい制服は、同時代の女性の普段着、つまり漢民族の女性のツーピースから発展してきたものです。1910年代ごろの服装は伝統的なスタイルより、袖が短くなったり、ウエストも細くなったり、スカートの形が変わったりしますが、形式はほぼ同じツーピースです。

1931年の道南学堂の写真（資料1－30）にシンガポールの女学生の服装が写っていますが、形から言うと、民国時代の女学生の新しい制服形はほぼ同じです。ただ、道南学堂の女学生の服装の上の部分は少し洋風化しているように見えます。民国時代の女学生のトップスは、一般的に、漢民族の紐ボタン式の伝統式な服です。色は白かブルーで、下は黒や紺色のスカートです。

森　女子にとっては、それが操服だったということですか。「男女学生服は操服を用いる」と書いているので、女子にとっては、漢民族の伝統服みたいなものが操服だとみなされたということですか。

劉　そうですね。清国の漢民族の上衣下裳、いわゆるツーピースは民国時代になると、徐々に改良され、女学生の操服となりました。

後藤　「学生服の伝来」というところで日本の体操教科書が翻訳されたという話がありました。たとえば現在の体操教科書を考えると、「こういう服装をしなさい」という記述があったりすると思いますが、そういう部分はないのでしょうか。体操のためには、たとえば「体にぴったりした服装をしなさい」というような記述があって、文字として体操服が規定されるなどということは、あまり見られなかったのでしょうか。

劉　それも探しましたが、なかなか出てきませんでした。日本の体操教科書はたくさんあって、それも調べてみましたけれども、それらの中の図はシャツにズボンというかたちです。ところが、実際には、日本の、とくに小学校の場合、子どもが着ているのは着物、和服でした。日本において、体操関連の本の中では早く洋装化していますが、実際の子どもたちはまだ和服でした。中国よりもずっと遅かったです。それもびっくりしたことですが、中国の場合は早めに学生服も洋服のようなものを着るようになったことがわかりました。